
並同窓会来る！

明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

並同窓会来る！

【Nコード】

N0151BA

【作者名】

明

【あらすじ】

綱吉がボンゴレを継ぎ、10年後イタリアで同窓会をします。カップリングは無しの方で行きますのでよろしくお願いします。

届いた手紙

部屋には一人の男がいた。その男は目の前に大量の封筒を並べ、一枚一枚手に取りながら差し出し主にチェックしている。

その時、同じ事を繰り返す流れ作業の中淡々と進んでいた男の手が不意に止まった。

それは日本から一通の手紙。

「これは……」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

コンコン

「どうぞ」

「失礼します」

執務室に入ってきたのは既に名実ともにボスの右腕となった獄寺隼人である。

「どうしたの？ 隼人」

「はい、十代目宛てに日本のお母様からお手紙が……」
「母さんから？」

綱吉は書類から目を上げ、手紙を受け取り、手紙に目を通す。

「…………へえ」

手紙を読んでいる綱吉の目はふっ、と昔を懐かしむような目になった。

「何と書いてあるんです?」

「並中で同窓会やるらしいよ」

「同窓会、ですか」

「うん」

「で、どうするおつもりですか?」

「そーだなあ」

綱吉は顎に手を当てて手紙を見ながら考え込む。

「どうしよう…。この日は大事な会議がこつちであつたよね?」

「はい。では欠席ということに「いいじゃねえか」

「リボーンさん!」

突然聞こえたリボーンの声に獄寺は慌てた。しかし綱吉は全く動揺していない。

「驚かねえんだな、ツナ」

「勿論。お前、隼人が入ってきた時からずっとあそこに居ただろう?」

と言って、部屋の扉を指差した。

「フン?。こんなの分かって当然だぞ。だが、前よりは成長したじやねえか」

「当たり前だ。おまえと何年一緒にいると思つてんだよ」

リボーンと綱吉は互いの顔を見合わせてニヤリと笑った。
ちなみに獄寺は、リボーンのさっきの言葉（前半）を聞いて頂垂れていた。

「まあいい。で、同窓会の事だが中学のときの奴らにお前の今の姿を見せて驚かせるのも悪くねえ。ってことで参加しろ」

「まあ、別に俺はそれでもいいんだけどこの日イタリ^{こっち}アで会議入ってるからいけないよ？」

「こつちに呼んじまえばいいじゃねーか」

「ああ、なるほど。」

綱吉はポンつと手を叩いた。

「さっすがリボーン、悪知恵が働くね。じゃあ隼人、ジェット機の準備よろしく。多分一機で足りると思うから。」

と、綱吉は可愛く笑った。

「本気ですか十代目！？　ここは世界屈指の大マフィア、ボンゴレの本部なんですよ！！？」

「え、ダメ？」

綱吉は小首を傾げて獄寺に問う。

「隼人はここでやるの反対…？」

「やつ、そ、そんなことは…」

「隼人だったら分かってくれると思ったのに…」

そして俯^{むつ}いて涙目になる。

「（ま、まずい！　十代目が泣かれてしまう！）わ、分かりました。至急準備を始めます」

「本当!？」

ぱあつと笑顔を咲かせて綱吉は笑った。

「やっぱり俺のこと一番分かってくれてるのは右腕の隼人だよな！」

右腕の隼人だよ

右腕の隼人だよ

隼人

だよ

隼人だよ

だよ

(脳内)

(一)

「はいっ、お任せください十代目！」

「うん、よろしくね。信じてるよ隼人」

[illegible]

獄寺は執務室から走り去って行った。

(ちよろいな)

「お前：黒くなつたな……」

「え、そうかな？ ふふふっ」

その時の綱吉の顔が黒い笑みを浮かべているのを見て、リポーンは昔はあんなに素直だったのにどこで育て方を間違えたのか……と重い溜め息を吐いた。

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

）　　）

黒川花はその日の朝、携帯の着信音で目が覚めた。
まだ眠いのかベッドの中から目を擦りながら携帯を手に取る。しかし、手に取ったとたん着信は切れてしまった。

「もうなにに…？」

溜め息を吐きながら起き上がり、着信履歴を開く。するとそこには最新の番号と同じ物がいくつか並んでいた。

「知らない番号…（まあいつか。急ぎだったらまた掛け直してくるでしょ）」

携帯を元の場所に置き、時計を見る。

a . m . 8 : 1 3

「うわ… やっちゃった……」

休めで良かった、と溜め息を吐く。
すると、また携帯が鳴る。さっきと同じ番号だった。

「もしもし」

最近迷惑電話が増えてきたこともあって（花に全く覚えはない）

少し警戒しながら通話ボタンを押した。

が、返ってきたのは拍子抜けするほど明るい声だった。

あつ出た。もしもしー？ 久しぶりだなー！

「……………」

あ、分かんねえ？ 俺だよ俺

「オレオレ詐欺……？」

や、違うつて！ 俺だよ。山本。山本武

相手は苦笑しながら名乗った。

「あら、久しぶりじゃない山本」

だなー１０年ぶりくらいか？

「それにしてもあんたがあたしに電話してくるなんて珍しいわね。つていうか私あんたに番号教えたかしら……」

考えてみてもかなりの秘密主義だった花は教えたのは信用出来る女子で、男には……たしか委員長のみだったはず。

いや、聞いてねえけど元同じクラスだった奴に聞いたらあつさり教えてくれたぜ？

……そうだった、思い出した。その信用出来る女子のほとんどが山本武親衛隊がファンクラブに入ってたんだっただわ。ああ、頭が痛くなってきた。

「……………そう。で、何の用？」

あのさ、同窓会のことなんだけど黒川幹事だったよな？

「ええ。そういえばあんたたち３人今どこにいるの？ 同窓会の葉書、あんたたちの分戻って来たから一応沢田のところに纏めて送つと

いたんだけど…」

今？ んー、いろんなところ回ってるからこってゆつのはねえかな。ま、いいじゃねえか。んで用件なんだけどさ、

山本はハハッ、と軽く笑って誤魔化する。

俺らその日用事あるからいけないんだよな。だから逆にお前らに来てもらえないかと思ってさ

んん……？

「どういう意味かしら？」

単刀直入に言うと同窓会の会場変えたいんだよな

はい？

「いまさら何言ってるのよ！ もう予約しちゃってるし、今さらどこも押さえられるわけじゃないじゃない！」

予約取ったのって並盛のホテル・マロスの広間だったよな？

「ええそうよ」

じゃ大丈夫だって。俺らがやつとくからさ

「やつとく？」

そう。会場のキャンセルと新しいとこの準備と用意、あと来る奴に知らせるのもな。ってゆうか会場はもう決まってるんだけどな
「え、どこ？」

あまりにも軽く言われたものだから隣の県とかかしら、と花は考えていた。が、

イタリア

は……………???

たつぷり30秒は固まったと思う。

おい聞こえてるかー黒川あー？

「え…ちょ、待ってよ！」

なに？何か不都合でもあるか？

「いやいや、ありまくりでしょ！」

え、どこ？

山本は本当に分からないといった風に言う。

「いや、イタリアまでの費用とかパスポートとかビザとか…」

あーそこらへんは気にすんなって

「いや、無理よ！？」

ハハッ、まあまあ落ち着けて。きっともうすぐ来るからさ

「え？ なんのこゝろ」

ピンポーン

ほら、来たぜ。とりあえず行ってみな？

山本は笑う。そしてよく分からないまま花は玄関に行き、ドアを

開
け
た。
。

届いた手紙（後書き）

この話は他のサイトでやっていたものを持ってきました

あ、自分のサイトなんで盗作とかじゃないですよ（-_-;）

近々そっちを閉鎖してこっちに移転しようかと、もくろみながら
も迷い中……

電話と使者

ピンポン

ピンポン

「はい」

ガチャ

「どちら様…」

そこには上から下まで真っ黒な青年がいた。髪も目もちろん黒。黒いピシツとしたスーツを着て、白いワイシャツに黒いネクタイを締めた、とても良い笑顔でニコニコと笑う若い青年だ。

「こちら、黒川様のお宅でしょうか」

「は、はい」

尋ねながら青年は嘘臭くニコニコと笑って問う。

「では、花様は御在宅でしょうか」

「私ですけど…（ちよつと！ あたし『花様』なんて呼ばれる覚え全くないんですけど!?!）」

「そうですか」

「（いやいや、そっちが聞いたんでしょよ!?!）」

「あの、私に何の用でしょうか？」

「私はこれがある方からあなたにお渡しするように仰せつかった者です」

にこつと青年はまた笑った。その時の青年の顔は「面倒くさい面

倒くさい面倒くさい」と連呼しているように見えた。
青年はスツと一通の封筒を差し出す。

「手紙…？」

裏を見てもそこには差出人の名は無く、紅い封蝋がありなにか紋章のようなものが押してあった。

「では、私はこれで」

「えっ！？ ああ、つ、ちよっ…！」

……………ボタン

花の制止を聞かず出て行ってしまった。

（引き留めてんだから、ちょっとは止まれつつのあの男…）

おい、黒川ー？

ビクッ

出て言ったドアを見ながら心の中で悪態を吐いていると携帯からいきなり声が聞こえて驚く。その声は通話を切っていなかった携帯から聞こえてきた。

「あ、ごめん山本」

ま、別にいいぜ。そうそう来ただろ？手紙

「あんたが行って来たってこれのことだったのね」

ああ、まあ

「で？これって？」

さっきの件

「ああ、同窓会のやつね」

言いながら花は封筒を開けた。

同窓会のお知らせ

ご無沙汰いたしております。いかがお過ごしでしょうか。
さて先日も通知した通り、このたび並盛中学校の同窓会を行います。

大変申し訳ありませんが日程を変更致することになりましたので
今一度検討して頂き、恐縮ですが八月一三日までに同封の葉書にて
再度出席のお返事を頂けると幸いです。

詳しい日時、場所は下記の通りです。それではよろしくお願い致します。

記

開催日 平成××年八月一七日

時間 午前八時半

集合場所 並盛中学校 校庭

参加費用 突然の変更のため、此方で全て負担させて頂きます。

備考 服を用意していない方は私服で結構です。持ち物は特に必要ありません。

八月九日

幹事代理 沢田綱吉

黒川花様

「…なにこれ」

え？何のことだ？ツナを勝手に幹事代理したこと怒ってんのか？別にいねえと思ったから勝手にしちまったんだけど…

「いや、別にいないから大丈夫だし悪くはないけど……じゃなくて！」

じゃなくて？

「なんでもうこんなの準備してんのよー！！」

花が電話口め向かってらしくない大声を上げる。

それは《Un capitano！？ ora．（隊長！時間です）》っと、Io lo capii．（分かった） 悪い黒川、時間だ。またな

「え、山本っ！？」

プツ、ツーツーツー……

……切れたし……

それから、何度山本の（だと思われる）番号へリダイヤルしても一度も繋がらなかった。

電話と使者（後書き）

区切り良いところで〜とか思ってたらず1話目と2話目の差が
ハンパなくなつた…（-_-;）

ちなみに「」が（話の）現場で日本語で、「」は現場でイタ
リア語。　　《》が電話の日本語で、《》が電話のイタリア語です。

見にくかったらすみません。

久しぶりの再会

というわけであつという間に同窓会当日。

山本はあの日の電話で全てこつちでやると言っていたが一応私が幹事なんだから、と一昨日やつとつながった電話で言つたところ、またあの青年が名簿を届けてくれた。その時に「こんな仕事増やしてんじゃねーよ」みたいな声が聞こえたのは無視しておこつ。

名簿を見ると、前回の参加人数より『参加』の人が驚くほど増えていた。その理由はほとんどのクラスメイトがボンゴレの経営する企業の系列の会社で働いていたためできた、所謂『大人の事情』があったからであることは誰も知らない。

花は私服のまま、時間より少し早いくらいに懐かしき並中の校庭に着いた。そこにはもう沢山の人があり、たがいに再会を喜び合っていた。周囲を軽く見回してみるも、中学時代に良くも悪くも目立つた三人組はまだ来ていないようだ。

「あ、花ー!!」

「京子、久しぶり!」

中学時代より、より大人びた顔つきになった親友が手を振って駆け寄ってくる。卒業してからめつきり会う機会も少なくなった親友にも会え、花もまた、再会を喜んだ。

それから約三十分後……

一応出席を取ると、一人が家の用事で急に来られなくなったものの、あのはあの三人以外全員来ていた。しかし、もう集合時間はとうに過ぎているにもかかわらず、あの三人組は現れる気配もない。女子たちはまだ来ないあの二大アイドル（？）をまだかまだかと待ちわびていた。

いまさらだが山本は電話で場所をイタリアと言ったが、なぜ場所がここなのだろう。もし本当にイタリアでやるとしても、場所は空港のほうで都合がいいし、それに私たちは誰一人パスポートを持ってきていない。

そんなことを考えているとまた女子たちから何度目かも分からない質問が投げかけられた。

「ねえ花ー、獄寺くんって来るんだよねー？」

「山本くんも来ないよね？」

「ねえ獄寺君はー？」

「一応出席になってたから、もうちょっとしたら来るんじゃない？」

それにうんざりした顔で返して、不意に空を見上げると遠くから何かが来た。目を凝らして見るとそれはすごいスピードでこちらに向かっており、それは校庭の上空にピタリと止まった。

花は唖然とした。周りも「は？」とか「え!？」とかいう顔をしている。

それからその真下にいて意識を取り戻した一人が校庭の脇のほうにすくっと後ずさって行く。それに続いて意識を取り戻したやつら

がほとんど一斉に波が引くように脇へ寄った。するとそれはそうなるのを待っていたかのように地面へそれを着陸した。

着陸して間もなく、中から人が出てきた。

「よお、皆！元気だったか？」

「うるせーぞ、野球バカ。ちつとは静かにしやがれ」

その人物は 山本と獄寺。二人とも昔よりものすごく格好良くなっていた。

山本は昔より爽やかさが薄れ顔つきが精悍になっており、獄寺は相変わらずアクセサリー類が多いが不良っぽさが消え、男でありながら独特の色気を漂わせていた。

これによって男女関係なく二人の信者がさらに増えたことを記しておく。

「まあいい、時間がないからな。さっさと行くぞ」

「ん、了解。おーい皆ー！行くぜー！！」

『え、どこに！？』

その他大勢が口を揃えて言う。

「まあそれは道々教えてやるからさ、な！」

突然の状況の変化に戸惑いながらもクラスメイト達はジェット機に乗り込んだ。

一方、花はというと、

(つていうかこれ、借りるのいくらかかるのかしら…)

と現実的な事を考えていた。

- - - - -

「おおー！」

「結構広い！もつと狭いかと思ってたー」

「へえーキレイじゃん」

山本と獄寺がクラスメイト達をジェット機の中に入れると、次々とそんな声が漏れた。

獄寺が先頭に立って細い通路を進む。クラスメイト達は手頃な椅子に座ろうとするがそこで制止がかかった。

「おい、何してんだ？」

制止をかけたのは先頭を歩いていた獄寺だった。

「いや、だってどこに座ってもいいんだろ？座っちゃだめなのか？」

座ろうとした男はちょっと不満そうに言った。

「いや、別にこっちでいいなら座ってもいいんだが」

ま、いいかというように向きを変え、スタスタと奥のほうへ歩くと、自動ドアが開いた。

不満そうにした男は獄寺の言葉を不思議そうに聞きながらも、元の

椅子に戻る。

ただの椅子のように見えたが見た目に反してもものすごくふかふかしてそれでいて座りやすい、とても良い椅子だった。満足感をおぼえ、椅子にふんぞり返るように座り、ほかの奴らと呼ばうと口を開く。

しかし、その時通路の奥のほうからワアっと言う声が聞こえる。

その声に驚き、後ろを見てみるとそこにはさつき獄寺が入ろうとした自動ドアがあり、皆がその奥をキラキラしたような目で見ていた。そんなに驚くものがあるのか、どうせトイレの大きさに驚いた、とかだろう、と見当をつけて覗いてみる。

さつきの考えは木っ端微塵に砕け散った。

そこは大きな部屋だった。上には小さなシャンデリアのようなものが。下一面には細やかで、繊細な模様が広がる赤絨毯が。正面には大きな丸い円を描いた机と綺麗に飾り付けられた椅子が。他にも、いかにも柔らかそうなソファ―が数個と一般的なモノより少し大きく、これもまた豪華に彫刻で刻まれた模様の入っている机がソファ―と同じ数あった。

獄寺は感動した様子のクラスメイトたちを置き去りにしてソファ―に腰を下ろし、一人優雅に紅茶を入れていた。入り口に固まって入ってくる様子のないクラスメイトたちに獄寺は気づいた。

「そんなとこで何やってんだ。早く入れ」

「そうそう。これからすぐ出るらしいからさ」

後ろから声がしたと思い振り向いたら、そこには一番最後に乗った山本がいた。

「全員乗ったか」

「おう じゃ、離陸すつから皆座れー」

皆は意外と素直に従って、どんどん手短なところに座っていき、ジェット機は無事に並盛町を離陸した。

久しぶりの再会（後書き）

最近、獄寺さんはともかく山本さんはなんであんなに身長がでかいんだろう…と考えます。

あの人は生粋の100%日本人のはず…。黒髪だし黒目だし！でもなんで身長あんなでかいの…！？みたいな 笑

私自身女と言っても身長が150センチという低さなのでものすごく…ね…ハハハ（目を逸らしながら&乾いた笑い）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます！

噂と嘘

時は遡り、こちらイタリアのボンゴレ本部。

こちらでは綱吉たちの部下の手によつて着々とパーティーの準備が行われていた。

普通マフィアの本部で一般人のパーティーなど、と不満に思うものも多いだろうが不思議な事に準備をしている部下たちの顔は嫌がるどころか満面の笑みを浮かべている者も少なくなかった。

この理由は約1週間ほど前のことである。

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

「おい、聞いたか？あの話。ありえないよなー、ボンゴレの本部で一般人がパーティーするなんて」

「ああ。いくらボスの御友人だからって…なあ？」

「だよなー」

今よく流れている噂を聞き、ばやいているのは雲部隊の新人隊員、ティールとウオムである。

「おい、お前らー！」

「あれ、柳さんどうしたんですか？」

「あの噂、おまえらも知ってたんだろ？うちの修練場でアレの話があるらしいぞ」

言ったのは二人の上司の柳で、彼は言いながら親指でクイツと後ろを指した。

「あれに説明って必要いらなくないですか？俺もうなに聞いても言い訳にしか聞こえないかも……」

「ま、せつかく説明してくれるって言うてんだから聞いてみようじやねえか」

柳は笑って、一人言いたいことを言ったらすぐに行ってしまった。上司から言われたのだから行かないわけにもいかない。二人は仕方ない、と溜め息を吐きながら修練場へと向かった。

- - - - -

カラカラカラ

『失礼します』

修練場に一礼してから中へ入る。

顔を上げたそこには人人人、と、一面の人ばかりがあった。ここにはやはり雲だけでなく、ほかの部隊の人間も大勢いるようだ。

雲部隊の修練場は雲の守護者である雲雀恭弥隊長があ性格のため、ボスが他の部隊より大きめに作ったらしい。だからよくボンゴレ全体の召集があるときは、主にここが場所として利用されるのだった。

新人の二人は改めてボンゴレの人の多さに驚いていると、ざわめきが前のほうからすーっと退いていき、人の視線が前に集まった。

周りの視線に促されるように二人も前を見ると、そこには自分たちのボスとその守護者がいた。

ボスの沢田綱吉隊長は一見気の弱そうな穏健派の置物ボスというのがもつぱらの噂だ。だが先輩（柳さん）に言わせれば、ひとたび戦場に出ると最前線で空を舞うようにすべての敵を倒していくらしい（というかそれに見惚れてたら、もう既に戦闘が終わっていたらしい）

まあ自分で見たこともないし、先輩（柳さん）はボスの信者だから幻でも見たのかもしれないが。

……でも、あのさいきょう（最恐・最凶・最強・最狂）な雲の守護者、雲雀恭弥隊長の上司なのだから強くないわけない……と、思う……。いや、もしかしたら見た目に反してあの隊長よりヤバい戦闘狂とか……。

……とにかく！ただの傍若無人であるようなボスでないことを願うのみだ。

「こんにちわ、皆」

マイクも使わずに言ったその言葉は、部屋全体に響いた。

「皆も知ってると思うけど、来週ここで俺の同級生を招待してパーティーすることにしたんだ」

ザワリ

「そのための準備を君たちに頼みたいんだ」

ボンゴレでパーティーをやること自体ありえないのに準備を自分の部下たちにやらせるなんて…ボスは何を考えているのだろうか……。修練場は噂が真実だった事に対して、ざわめきと共に啞然としたような微妙な空気が漂っていた。

「お言葉ですが、ボス！」

あれは大空部隊の中の一つの班長を務める………さんだ。誰も普通ほかの部隊の人の名前まで覚えていない（ハズ）。

「なに？ファイリオ」

「何故ボンゴレでパーティーを催す必要があるのですか。一般人がここへ来るなど…危険すぎます！」

最も過ぎる意見だ。わざわざこんなところに一般人を連れてきてパーティーをするなんて。それにもし万が一にでも敵に襲撃されたら命の危険が伴う。

「大丈夫。当日は俺たちが付きっ切りで警護するから」

「隊長方が直々に…！？」

ザワリと再び空気が揺れた。

「そうなさるとしても、ボスの御友人らがいらっしやるという事を知ったファミリーがここに到着するまでに襲撃してきた場合は」

「

「迎えと送りには隼人と武をつける。不満？」

「いいえ。しかし、いかに隊長らでも目の届かないところもあるはず。そんなところであつた場合はどうなさるのですか」

彼とて好きで自分が敬愛するボスにこんな事を言いたいわけではなかった。しかし、もしも本当に襲撃され誰かが怪我を負ったり…死んでしまった場合、一番悲しむのはボス自身という事も知っていた。それほどに優しいボスだからこそ、フィリオは彼に付いていつているのだ。そんなボスに悲しい思いをさせたくない、彼はそれだけを考えていた。

「まあ、尤もだよ。そうなんだけどさ……」

ボスは懐かしそうに眼をそっと細める。

「その日俺はこっちでやる事があって出られないんだ。いつも通知が来る度にそうだから、俺たちはまだ一度も出た事無いんだよね。まあ、毎度のことだし今回もまた無理かなーって思ったんだよ。もししたら、」

とても嬉しそうに

「じゃあ俺たちがそっちに行つてやるよ、って言うてくれたんだ。だから…せめて彼らをがっかりさせたくない……そして、俺の居るこの自慢の場所で盛大に彼らをを迎えたい…、そう、思ったんだ」

ボスの友を想う気持ちに心を打たれたフィリオは目を潤ませて言った。

「私たち部下一同、ボスの御友人らの為に精一杯やらせていただきます！」

口には出していないものの、他の皆の顔もさっきまでとは違ってい

た。

「ありがとう」

その様子を見て、嬉しそうにボスは微笑んで言った。

「まあ、嘘なんだけどね」

.....。

.....。

.....。

『えええっ!!!?!?』

「ごめんごめん。つい、ね？ちょっと悪戯心が……」

あまり悪びれなく子供のように舌を出しているボス。それを嵐と霧の女性は苦笑し、雨はいつも通り楽しそうに笑って見ていた。

「でもこっちにきてくれるのは本当だよ？で、お詫びと言っではなんだけど同じ日、もう一つパーティーをやります!」

まだ何か……?という若干の恨みが籠った目線を遠慮なくビシバシと叩きつけてくる部下たちに苦笑しながらボスは言った。

「それは君たちへのお礼のパーティーだよ」

俺たちは揃って首を傾げた。

「今年は俺がボンゴレ十代目になって10年目なんだよね。だからここまで付いてきてくれた君たちにお礼がしたいんだ」

ボスはありがとう、と言って俺たちに頭を下げた。

「だから、今回の事はこれでチャラ、ってことにはならないかな？」
だめ？とも言うようにボスはフォリオに目を向ける。

「…分かりました。いいでしょう、やらせていただきます」

フィリオは、なあとでも言うように周りの隊員へ目を向けると、それを受けた隊員は揃ってしょうがないなあというように笑って肩をすくめた。

ボスはそれを見て満足そうに笑っていた。

噂と嘘（後書き）

付け足し。

このお礼パーティーは同窓会と同時進行でやるから、俺たちの事は気にしないでみんな楽しんでね、と言う意味です。

わっかりにく〜い。あははは、は…（泣）
文才…ほしいなあ……

お気に入り登録してくれている方が増えていてびっくりしました。
感謝です！！

意見などありましたら感想にてよろしく願います！

行き先はイタリアです

時は戻ってジェット機内。

そこには窓に寄って外を見る元クラスメイトの男子たちの姿。すっかりどこに行くのかと思ったことなど記憶の彼方へ捨て、窓から見える外の景色を見て楽しんで(?)いる。

「みんなすつげえ楽しそうなのな」

「ま、普通に過ごしてれば空を飛ぶ機会なんてほとんどないしな」

「ははっ、確かに！俺たちが特殊すぎるんだよな」

「特に十代目とお前は日常的に飛んでるしな」

「あ、そっか。でもそういうえば最近はあるまりそうゆう任務ねえな」

「俺たちは任務を渡す側の人間になっちまったからな。それに俺たちが出る任務がそうそうあってたまるかよ」

「っていうかそんななんあったら今頃世界終わってるかもしんねえ……とちよっと思う獄寺。」

「まあな。でもホント最近体動かしてねえしな。獄寺、あっち付いたらちよっと付き合えよ」

「いいぜ。俺も最近勘が鈍っちまったしな。付き合ってやる」

付き合ってやると言ったものの、あの日、同窓会の手紙が来たあの時りぼーんから受けた言葉いまだに引きずっていた獄寺はまたそのことを思い出し、ちよっとへこんでいた。

「なあなあ山本」

そこにさっきまで騒いでいた男どもが声をかけてくる。

「ん、なんだ？」

ずくんとした空気を出す獄寺をこれはツナが小僧が何か言ったな、と何気に鋭くなった山本は苦笑いをするが、声をかけられさっきと一変笑顔を向ける。

「お前さっき行き先は道々、とか言ってたよな？　で、結局どこ行くんだよ」

男たちが話しかけてきた時点でジェット機内が妙に静まり返っており、みんな耳を澄ませていることが分かる。

「ああ、わりいわりい。言ってなかったな。今から行くのはイタリアだぜ」

.....。

「んん？　悪い、聞き取れなかった。もっかい言ってくんね？」

「イタリア。」

.....。

「も、もっか」

「イタリア。」

二回目は即答、三回目は質問すら遮って言われてしまった。
三度同じことを言われて、それを間違いないここにいる全員が聞いてしまったら、もはや疑う余地なんて米粒ほどにもない。

そして、機内にいる全員、先生すらもが叫んだ。

『イタリア〜〜！！！？？』

叫んだ後も口を大きく開け、あぐりとしている元クラスメイト＆先生を見て、その反応が分かっていたかのように顔で「あゝやっぱ」と物語りながら、指で耳栓をする獄寺。「みんなリアクションすっげ〜」などと言って爆弾発言をかました張本人こと山本は笑って、しかもちゃっかりこちらにも耳栓していた。

例外として最初から行き先を知っていた花と「へえ〜、楽しみ〜！」とどこかズレている天然な発言をしている京子もいたが。

「え、これイタリア向かってんの！？」

「あたし海外に行くお金なんてないよ！？」

「イタリアでだ？ 同窓会なんてどこでやるんだ！」

「私今パスポート持ってないよ！？」

「俺もだー！！」

「ってゆうかビザなくて入れんのかよ！」

「イタリア楽しみ〜！！」

「京子……………」

「俺何も持ってきてきてねえぞ！？ どうすんだよ！」

「そういえば私、一日しか休みもらってないんだけど！」

「俺も！ たしかイタリアって片道十時間とかかかるじゃん！」

「ああ〜！ 明日部長に怒られる〜！！」

そんな口々に喚く（？）みんなを見て山本は言い放った。

「え、なんか不都合ある？」

みんなの双眸が一瞬にしてギロツと山本を向く。そしてまた同じような事を一気に言われた。

「ふ〜ん。そんなことが」

普通なら一気に聞き取れないような大人数の言葉を全て理解したような言葉だった。

それから山本は一気にしゃべりだす。

「まずイタリアまでの金の心配は必要ない。案内にもあつた通り、金は全てこっちで負担する。パスポートとビザはいらない。これから入るところは俺たち専用の出入り口だからな。もちろんイタリア政府にも許可は取つてある。それなりの信頼もあるから融通も利く。このジェット機は片道三時間で着くから日帰りでも心配ない。泊つて行きたいやつは俺たちに言えば一泊くらいだったら泊るところを提供してやる。一日しか休みとってないけど、もうちょっといいたいってやつも言ってくればお前らの会社のほうに届けといてやるよ」

クラスメイトたちはポカンとした。一方の山本は笑顔で「で、他は？ もうない？」と言っていた。

「おい、一個忘れてるぞ」

「え、嘘。なに？」

「場所」

「ああ！ 忘れてたぜ」

「しつかりしろ。それでも幹部かテメエは」

「あははっ、ワリっ」

さつきまで全く口を挟まずにいた獄寺が、大量の横文字が書いた書類のような束を机に置いて言った。いつの間にか眼鏡をかけている。

「んで、場所なんすけど、会場は俺たちの仕事場なんで心配いらな
いっスよ？ 先生」

仕事場？ ってゆうか『幹部』ですと？

「そついえばお前ら、同じトコで働いてんだろ？ どこで働いてん
の？」

1人の男が聞くと、みんな気になっていたのか口々に同じような事を聞いてきた。すると山本は困ったように笑って、助けを求めるように獄寺を見る。再び書類に目を落としていた獄寺はその視線に気付き、ふう、と息を吐いて眼鏡を外した。

「悪いな。それは十代目の許可がなければ言えない」

『十代目？』

はて、どこかでよく聞いていた言葉のような……？

「俺らのボスだぜ」

『……………はあ……………』

ボスと言われる人なのだからきつと偉い人なのだろう。たぶん社長の事だと思いがなんで『ボス』？

そんな事を思いながらもジェット機は進み、着々と目的地に近付いて行っていた。

行き先はイタリアです（後書き）

自分で書いておきながら『ボンゴレってどんだけ世界中に会社持つてんだよ…』って言うてました。

いやゝ、ほんとにどんだけ（古いorz）

一応イタリアの治安はボンゴレが守ってるので、イタリア政府は結構ボンゴレの事は信用してます。ってことにしとしといてください
笑

ちなみに説明の時の口調が山本っぽくないのは、部下に説明する時の口調に慣れてしまったからです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0151ba/>

並中同窓会来る！

2012年1月8日18時48分発行